

2.Doppelcharakter der in den Waren dargestellten Arbeit

(1) 最初から商品は、我々に対して二面的なものとして、使用価値及び交換価値として、現れた。次には、労働も、それが価値に表されている限りでは、もはや、使用価値の生みの母としてのそれに属するような特徴をもっていないという事が示された。このような、商品に含まれている労働の二面的な性質は、私が初めて批判的に指摘したものである。この点は、経済学の理解にとって決定的な跳躍点であるから、我々は、より詳細にこれを説明しておかなければならない。

(2) 二つの商品、たとえば一着の上着と10エルのリンネルをとってみよう。

前者は後者の2倍の価値を持っており、従って、10エルのリンネル= W とすると、
一着の上着= $2W$ と表すことができる。

(3) 上着は、ある特殊な欲望を満足させる使用価値である。それを生産するためには、一定種類の生産的活動が必要である。この活動は、その目的、作業様式、対象、手段、結果によって規定されている。このように、その有用性がその生産物の使用価値に、またはその生産物が使用価値であるということに、表される労働を、我々は、簡単に有用労働と呼ぶ。この観点のもとでは、労働はつねにその有用効果に関連して考察される。

(4) 上着とリンネルとが質的に違った使用価値であるように、それらの存在を媒介する労働も質的に違ったもの—裁縫と織布である。もし、これらの物が質的に違った使用価値でなく、従って質的に違った有用労働の生産物でないならば、それらは、およそ商品として相対することはありえないだろう。上着は上着とは交換されないのであり、同じ使用価値が同じ使用価値と交換されることはないのである。

(5) いろいろに違った使用価値または商品体の総体のうちには、同様に多種多様な、属や種や科や亜種や変種を異にする有用労働の総体—社会的分業が現れている。この社会的分業は、商品生産の存在条件である。とはいえ、商品生産が逆に社会的分業の存在条件であるのではない。

古代インドの共同体では、労働は社会的に分割されているが、生産物が商品になるということはない。あるいはまた、近くの例をあげれば、どの工場でも労働は体系的に分割されているが、この分割は、労働者たちが彼らの個別的生産物をお互いに交換したりはしない。ただ、独立に行われていて互いに依存しあっていない私的労働の生産物だけが、互いに商品として相対するのである。

(6) こうして、どの商品の使用価値にも、一定の合目的的な生産活動または有用労働が含まれているということが分かった。いろいろな使用価値は、それらの内に質的に違った有用労働が含まれていなければ、商品として相対することはできない。社会の生産物が一般的に商品という形態をとっている社会では、即ち、商品生産者の社会では、独立生産者の私事として互いに独立に営まれるいろいろな有用労働のこのような質的な相違が、1つの多肢的体制に、即ち、社会的分業に、発展するのである。

(7) ともあれ、上着にとっては、それを着る人が仕立屋自身であろうと、彼の顧客であろうと、どうでもかまわないのである。いずれの場合でも、上着は使用価値として働くのである。同様に、上着とそれを生産する労働との関係も、裁縫が特殊な職業になり社会的分業の独立な分枝になるということによつては、それ自体としては少しも変化してはいない。人間は、衣服を着ることの必要に迫られたところでは、誰かが仕立屋になるよりも何千年も前から裁縫をやってきた。

しかし、上着やリンネルなど、すべて天然には存在しない素材的富の要素の存在は、つねに、特殊な自然素材を特殊な人間欲望に適合させる特殊な合目的な生産活動によって媒介されなければならなかった。それゆえ、労働は、使用価値の形成者としては、有用労働としては、人間の、すべての社会形態が

ら独立した存在条件であり、人間と自然との間の物質代謝を、従って、人間の生活を媒介するための、永遠の自然必然性である。

(8) 使用価値である上着やリンネルなど、いろいろな商品体は、二つの要素の結合物、自然素材と労働との結合物である。もし、そのものに費やされた有用な労働を取り去ってしまえば、あとには常にある物質的な土台が残るが、それは人間の助力なしに天然に存在するものである。

即ち、ただ素材の形態を変えることができるだけである。それどころか、自然的素材を変形するに当たっても、人間は常に自然の力に助けて貰っている。だから、労働は、それによって生産される使用価値の素材的富の、ただ1つの源泉なのではない。ウィリアム ペティの言うように、労働は素材的富の父であり、土地はその母である。（『租税貢納論』岩波文庫p119）

(9) さて、我々は、使用価値として見て来た商品から、ここで、商品の価値の方を考えてみることにしよう。

(10) 前に示した想定、一着の上着は10エルのリンネルの2倍の価値があるという想定、に立ち戻ってみよう。この想定は、単に量的な違いであるが、量が違うことを示しているだけではない。我々が注目すべきものは、もし仮に一着の上着の価値が10エルのリンネルの2倍であるとしたら、20エルのリンネルは一着の上着と同じ価値にならねばならぬということである。価値としては、上着もリンネルもそれぞれ同じ実体であり、同種の労働の客体的表現である。

(11) もし、その生産的活動の特別な形式を見ないとすれば、すなわち、労働の有用な性格を見ないとすれば、そこに残るものは、単なる「人間の労働力」の支出であるという事である。

裁縫と織布とは、違的に違った生産活動であるとはいえ、両方とも人間の頭脳、神経、筋肉や手などの生産的支出であり、この意味で両方とも人間労働である。異なる質の労働ではあるが、仕立てや機織りは、「人間の労働力」の、二つの違った支出形態なのである。

確かにこの労働力は、それなりの発展的な技量度に到達していなければならない。しかし、商品の価値は、ただの人間労を、人間労働一般の支出を、表している。ブルジョア社会では、将軍とか銀行家は大きな役割を演じているが、これに反してただの人間はひどくみすばらしい役割を演じているのであるが、この場合の人間労働についても同じ事である。それは、平均的に誰でも普通の人間が、特別の発達なしに、自分の肉体の内にもっている単純な労働力の支出である。

もちろん、単純な平均労働そのものも、国が違い文化段階が違えばその性格は違うのであるが、しかし、現にある1つの社会では与えられている。より複雑な労働は、ただ、単純な労働が数乗されたもの、またはむしろ数倍されたとみなされるだけであり、従って、より小さい量の複雑労働がより大きい量の単純労働に等しいということになる。このような換算が絶えず行われているということは、経験が示すところである。…以下、簡単にするために、各種の労働力を、直接に単純労働力として見ていくことにする。（注15:ここではまだ労賃については言及していないという事に注意。）

(12) こういう訳で、価値としての上着やリンネルではそれらの使用価値の相違が捨象されているように、これらの価値に表されている労働でもそれらの有用形態の相違、裁縫と織布との相違は捨象されているのである。使用価値としての上着やリンネルは、布と糸に、特別の生産活動を組み合わせたものであるが、これに反して、価値としての上着やリンネルは、単なる同質の労働凝固であるが、それと同様に、これらの価値に含まれている労働も、布や糸に対するその生産的作用によってではなく、ただ人間の労働力の支出としてのみ認められるのである。裁縫や織布が使用価値としての上着やリンネルの形成要素であるのは、まさに裁縫や織布の互いに違った質によるものである。裁縫や織布が上着価値やリンネル価値の実体であるのは、ただ、裁縫や織布

の特殊な質が捨象されて両者が同じ質を、人間労働という質をもっているかぎりでのことである。

(13) 上着やリンネルは価値一般であるだけではなく、特定の大きさの価値である。我々の想定では、一着の上着は10エルのリンネルの2倍の価値がある。では、この価値量のこのような相違はどこから生ずるのか？それは、リンネルは上着の半分の労働しか含んでおらず、従って、リンネルの生産に必要な労働力に較べて、上着の生産に必要な労働力はその2倍の時間が必要であるという事実による。

(14) 従って、次のようにまとめられる。使用価値に関して云えば、商品に込められた労働はその質を考えるが、価値として見ることになれば、そこに込められた労働は量であり、とにかくにも、純粹かつ単質な「人間の労働」とみなしてその量として見なければならぬのである。使用価値の場合は、どのようにして？とか それはなんなのか？(das Wie und Was)という事が問題なのであり、価値の場合は、労働のどれだけ(Wieviel)が、即ち、その継続時間が、問題なのである。商品の価値は、ただ単に、そこに込められた労働の量で表されるものであるから、すべての商品は、それなりの比例関係にある同じ価値のものである、と云える。

(15) 上着を作るために必要な、いろいろと異なる、有用な労働の生産性に変動がなければ、上着の価値の総額は、上着の数が増えれば、増大する。一着の上着が、 x 日の労働によってできたとすれば、二着の上着は、 $2x$ 日の労働ということになり、以下同様の計算となる。そこで、もし、一着の上着を作るに必要な労働期間が倍になったり、半分になったりした時には、どうなるか。倍になれば、一着の上着は、以前の上着の二着分の値に跳ね上がる。

半減すれば、二着の上着が、以前の上着の一着分の値になる。どちらの場合でも、各一着の上着は、以前と同じ効用で、違いはなにもない。各一着に込められた有用な労働の質も変わらない。

ただ各一着の上着に費やされた労働の量は、以前とは違っている。

(16) 使用価値の量が増えれば、物質的な富の増加となる。一着の上着はただ一人にしか着せられないが、二着の上着は二人に着せることができる。ところが、物質的な富の量の増加は、その価値の大きさの下落を同時に引き起こすことがあり得る。このような相反する運動は、労働の二面的な性格から生ずる。生産力は、もちろん、常に有用な具体的な労働の生産力であって、じっさい、ただ与えられた時間内の合目的生産活動の作用程度を規定するだけである。それゆえ、有用労働は、その生産力の上昇・低下に比例して、より豊富な、またはより貧弱な生産物の源泉になるのである。これに反して、生産力の変動は、価値に表わされている労働それ自体には少しも影響しない。生産力は、労働の具体的な有用形態に属するのだから、労働の具体的な有用形態が捨象されてしまえば、もちろん生産力はもはや労働に影響することはできないのである。

それゆえ、同じ労働は同じ時間には、生産力がどんなに変動しようとも、常に同じ価値量に結果するのである。しかし、その労働は、同じ時間に違った量の使用価値を、即ち、生産力が上がればより多くの使用価値を、生産力が下がればより少ない使用価値を、与える。それゆえ、労働の豊度を増大させ、従って、労働の与える使用価値の量を増大させるような生産力の変動は、それが使用価値総量の生産に必要な労働時間の総計を短縮する場合には、この増大した使用価値総量の価値量を減少させるのである。逆の場合も同様である。

(17) (まとめ) すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間の労働力の支出であって、この同様な人間労働または抽象的人間労働という属性においてそれは商品価値を形成するのである。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を既定された形態での人間の労働力の支出であって、この具体的な有用労働という属性においてそれは使用価値を生産するのである。(p63)

第二節:商品に表される労働の二重性(了)